

平成 24 年度卒業式式辞

本日、晴れて卒業式を迎える人文学部国際コミュニケーション学科の 176 名の皆さん、人文学部人間科学科の 153 名の皆さん、現代経営学部現代経営学科の 141 名の皆さん、そして大学院の現代経営研究科の 2 名の皆さん、卒業おめでとうございます。

併せて、この晴れの日を長い間楽しみにして来られましたご家族の皆様にも、心からのお慶びを申し上げます。

また、学生の教育や日常のさまざまな指導・支援に携わって来られた教・職員の皆様にも、そのご苦労に、感謝の言葉を送りたいと思います。

東洋学園大学は、平成 4 年 4 月に開設されて以来、満 20 年が経過しました。大学そのものの歴史は決して長くはありませんが、その母体である『東洋学園』の高等教育に関わる歴史を顧みますと、その源は、大正 15 年に開設された東洋女子歯科医学専門学校にまで溯ります。

この歯科医学専門学校は 25 年の歴史を刻み、卒業生は女性歯科医師として、日本の歯科衛生領域において多大の活躍をいたしました。しかし、戦災による損失が大きかったことから、太平洋戦争終了 5 年後の昭和 25 年に閉校を余儀なくされ、その後英語教育で高い評価を得た東洋女子短期大学へと生まれ変わりました。この短期大学の歴史も併せますと、『学校法人東洋学園』は、実に 87 年もの高等教育の歴史を有しております。

今日卒業される皆さんは、このような輝かしい歴史と伝統を引き継いだ『東洋学園大学』で学び、価値ある学生生活を送り、そしていま、晴れて巣立つことになりました。

皆さんは一部を除いては、本学に入学してからは、学生生活の前半の 2 年間は、自然豊かな、そして時間の流れのゆったりと感じられる流山のキャンパスでのびのびと、学生としての大切な基本と良識を身につけるための豊かな時を過ごされました。そして後半の 2 年間は、東京のまさに都心であるこの本郷のキャンパスで、専門的な深い内容の勉強と、価値ある社会人となるための素養を磨きつつ、今日の日を迎えられました。そして今、晴れて東洋学園大学に別れを告げることになりました。

皆さんのこれから辿るであろう人生の道程は、決して平坦なものではないと思われます。しかし皆さんは、本学の教育の中で身につけた、「事に際し自ら考え、判断し、そして解決のために行動することのできる力と、豊かな人間性」を持って、その一つ一つを着実に乗り越えて行く事ができるものと、私は期待しております。

話は変わりますが、2 年前の 3 月 11 日、午後 2 時 46 分、東北地方の太平洋沖を南北に 500 キロにも及ぶ広大な範囲を震源とした巨大地震が、突如として発生しました。同時に岩手県、宮城県、福島県、茨城県の沿岸地帯を中心として、関東各地にも及ぶ想像を絶する巨大な地震と、それに伴う類を見ないほどの大津波が押し寄せました。そして約 18,600 名に及ぶ貴い命が奪われ、地震と津波により被災した家屋は膨大な数に上りました。

しかも不幸なことに、福島県では、津波により被災した原子力発電所が大爆発を起こし、そこから漏れ出た放射性物質が原発の所在する地点を中心に広大な範囲に飛散し、東日本は地震、津波、そして原発事故の三重の巨大な災害に見舞われました。しかもいまだに原発事故被災者も含む避難者数は31万人を超えております。

この地震により、ほぼ同じころに東京都内で催されていたある学校の卒業式において不幸な人的被害が発生したこと、なおも大きな余震が繰り返し発生し続けていたことから、皆さんの2年先輩の卒業式を3月20日に控えていた本学は、慎重に慎重を重ねた結論として卒業式を執り行うことを決断し、簡略化した式典ではありましたが無事に実施することができた時のことが、きのうのこのように蘇って参ります。

あれから満2年が過ぎました。復旧・復興を担当する政府の責任ある方々の発言の多くにおいては、復旧・復興対策は順調に進んでいるとされ、一方、被災者の多くの発言によりますと、復旧活動は遅々として進んでおらず、被災者側の個々のあるいは地域としての努力は既に限界に達しているとする声が、次第に高まって来ているように思われます。

既に、被災地域を担当する医療や社会心理の専門家からは、国や県側と被災地域の住民との間の復旧・復興に関する認識の差が、今後とも改善されないままに放置されるような場合には、被災地域の人達のやり場のない不満や将来に対する不安が大きなストレスとなり、心や体の健康に深刻な影響を及ぼす可能性が示唆されております。

今日卒業される皆さんは、長年にわたり繰り返される政治の混乱、異常なほどに累積した国の負債、一流企業にまで波及する企業の業績悪化、産業の停滞、そしてその結果としての学生たちの厳しい就職難、しかもそれに追い打ちをかけるかのように発生した東日本大震災など、どこを向いても希望の見えない沈滞した、まるで日本全体が『うつ状態』にでも陥ってしまったかのような状況の中で、青春の時を過ごしてきました。

日本全体がこのような沈滞した雰囲気の中でまさに喘いでいた昨年10月、京都大学の山中教授がノーベル医学生理学賞の受賞者として決定されました。そしてこの報道は、日本に住む多くの人たちに、久々の明るい希望を与えてくれるものでもありました。しかも、テレビのニュースに現れた山中教授は、決して奢らず高ぶらず、爽やかで誠実なその姿と語り口は、全ての人々の心を捉え、日本国中に希望の火を灯してくれたと言っても過言ではありません。

しかも山中教授は医師として研究者として、決して特別に恵まれた選りすぐられた人ではありませんでした。私はこのような点も含めて、山中先生の存在とその生き方は、いまの日本の若者に大きな希望を与えてくれるように感じられました。

山中教授は医学部を卒業し、新進のしかしまだ未熟な医師として研修医生活に入り、長年の夢でもあった整形外科の1研修医として訓練を受け始めた時、大変に辛い厳しい体験をしたそうです。それは、整形外科医としての研修時、本人は一生懸命努力はしたものの、結果として彼一人だけが極端に低い評価をつけられたことから、自信を失い悩み苦しんだそうです。その結果として彼は、患者さんを直接治療する臨床医となることをきっぱりと

諦め、実験を通じて医学に貢献する道として、薬理学の研究者となることを選びました。

しかし薬理学の研究者としてほぼ10年間ほど頑張ったものの、なかなか思ったような成果を挙げるまでには至らなかったことから、このままの人生を歩んでよいのかと自問しているうちに次第に気分が滅入ってしまい、朝も起きられず仕事に行くこともできないほどに気分が滅入ったそうです。

しかしそれでもいったん選んだ基礎医学の研究を諦めず、さらに高い研究ができるところを探しているうちに、偶然見つけた研究所に思い切って応募し採用されたことから一気に可能性が開花し、人工多能性幹細胞（iPS細胞）を作るという世界最先端の研究へと突き進むことが出来、遂にはノーベル賞を受賞するに至りました。

このような人生を歩んできた山中教授の、体験に基づいた物事の考え方や感じ方は、若い人たちだけでなく、私自身にも沢山の大事なことを教えてくれるように私には感じられました。

今日は、これまでの山中教授の言動から、私が勝手に素晴らしいと感じたことのうちの3つをご紹介します、皆さんの旅立ちへのはなむけとしたいと思います。

その1つは、『失敗を恐れない』と言うことです。もう1つは、『感謝の心を豊かに持つ』と言うこと、3つ目は『爽やかであれ』、という事です。

教授は常々、『失敗しないと成功はできない。苦しいときにもう一歩だけ前に行くことを考えることが大事』と言うことを、自分自身に言い聞かせてきたそうです。

前にも触れましたが、教授は大学を卒業したばかりの研修医時代と薬理学の研究者となった30歳の若手研究者の2度、大きな壁にぶつかり、挫折を体験しました。そのいずれも、医師として研究者として人生を決するような大決断をしなければならないときでした。そのとき、悩み苦しみ熟考したうえで『やるべきことをやらなくて後悔するくらいなら、やってから後悔しよう』と考え、きっぱりと決断を下し、医学の基礎研究の道を選び、その道を邁進し続けた結果として遂には人工多能性幹細胞（iPS細胞）を作成する技術を開発するに至りました。

テレビで拝見する山中教授は、その姿も話す内容もまばゆいほどに爽やかです。そして人と対しているときの様子から、人柄としての誠実さがにじみ出てきます。私はその姿に深く感動しました。

それはきっと、大きな困難に直面したとき、必死に悩み苦しみ、そして熟考し、結果として大事と考えたことは決して諦める事なく、目標に向かって挑戦し続ける意志と、もう1つは、両親や恩師のみならず、自分の部下に対してまでも敬意と感謝の気持ちを忘れないその心から、自然と湧き出でて来るもののように、私には感じられます。

今日卒業される皆さん、卒業に際して今一度、山中教授の人生とその人となりに関心をもってみてください。その中からきっと、これから社会人として仕事をしていくうえで参考になるものがいくつも見つかるのではないかと、私には思われます。そしてもし時間の余裕があるなら、山中教授が失意のときに繰り返し読んだという、アメリカのキャリア教

育の指導者であるデイル・ドーテン氏による『仕事は楽しいかね?』（きこ書房）という本を読んでみてはいかがでしょうか。

皆さんは今、晴れて東洋学園大学に別れを告げることになりました。これからは、社会の荒波の中で揉まれ鍛えられ、さらに成長してくれるものと、心より期待しております。

そして、青春の最も多感な時を過ごしたこの東洋学園大学を、『心のふるさと』としていつまでも大切に思ってください。

私たち教・職員一同は、この東洋学園大学が皆さんの『心のふるさと』にふさわしい大学であり続けるために、これからも一層の努力を続けてまいります。

皆さんのこれからの新たな人生が実り多いものであることを祈りつつ、本日の式辞を終えたいと思います。

平成 25 年 3 月 20 日

東洋学園大学学長 一ノ渡 尚道
(本郷体育館にて)